



明治大学は4月7日、2025年度入学式を日本武道館（東京都千代田区）で挙
行した。満開の桜に迎えられ、2025年度の新入生9377人（学部生8216人、大
学院生1161人）が明大生としての第一歩を踏み出した。

【2・3・12面に関連記事】

式典は学部・大学院別に2部制で行
われ、いずれも上野正雄学長の告辞、
柳谷孝理事長の祝辞、新入生代表によ
る宣誓と進行した。

告辞で上野学長は、明治大学の建学
の精神「権利自由、独立自治」に触れ
「明治大学の仲間になるということ
は、失敗を恐れず挑戦するというこ
と。挑戦せず失敗したことがない人
は、他人の失敗にも不寛容になる。失
敗を恐れず多くの挑戦をして、社会に
イノベーションを起こす人材になっ
てほしい」と激励した。

続く祝辞で柳谷理事長は、「一人一
人が主体性と自らを律する力であるセ
ルフガバナンスを強化し、本学におい
て揺るぎない『個』を磨き、人間性豊

かに成長を遂げられることを期待す
る」と語りかけた。

新入生代表による宣誓は、午前の部
に農学部の古澤有羽さん、午後の部に
経営学部の福島梨理香さんが登壇。古
澤さんは『「前へ」の精神を忘れず挑
戦を続けることで、自分を超えてい
く力を育てていきたい』、福島さんは
「明治大学でのたくさんの新しい出会
いから、さまざまな価値観に触れ、対
話を絶やさないようにしたい」と決意
を述べた。

宣誓の後、明治大学先端数理科学イ
ンスティテュート（MIMS）の杉原
厚吉研究特別教授による入学記念講演
が行われた。錯視研究の第一人者で、
世界錯覚コンテスト優勝4回、海外で



新入生宣誓に立つ古澤さん（午前）、福島さん（午後）



MIMS・杉原研究特別教授による入学記念講演

も特別展示を行うなど、立体錯視アー
ティストとしても活躍する杉原教授は
「大学は自分で学びをみつけて歩いて
いく場所」として「知の世界を歩くた
めの私の技法」をテーマに講演。「学
問の探求は芸術活動」と表現し、「自
分の声をよく聞き、自分で決断し、自
分に制限を設けないこと。そして歩き
始めたら、自分を信じて諦めないこ
と」と新入生にエールを送った。その
後、校歌斉唱が行われ入学式は閉式し
た。

続いて、新入生歓迎セレモニーが行
われ、交響楽団、グリーンクラブ、混声
合唱団による新入生歓迎演奏と、校友
代表によるメッセージ映像が放映され
た。登場したのはフィギュアスケータ
ーの樋口新葉さん（2023年商卒）、音
楽家の宇崎竜童さん（1969年法卒）、
俳優・歌手の上白石萌音さん（2024年
国日卒）の3人。新入生への熱いメッ
セージに大きな拍手が送られ、セレモ
ニーは終了となった。

センターフォレスト竣工式

生田キャンパスにおける教室数不足や教育施設の
老朽化の問題、さらには社会の激しい変化に対応
し、“主体的な学びの場”の創出を目的として生田
キャンパスに整備された新築建物「センターフォ
レスト」の竣工式が3月27日に執り行われた。

竣工式には柳谷孝理事長、上野正雄学長をはじめ、
法人役員、大学役職者、建設関係者、地域の代
表者らが列席。白幡八幡大神の神職による神事に
続いて施設見学会、直会（竣工披露宴）が行われた。

直会では柳谷孝理事長があいさつに立ち、設計監理
を担当した(株)日建設計、施工を担当した(株)フジタ、
家具・備品を担当した(株)清和ビジネスに謝意を表す
とともに、「世界に開かれた大学、世界に発信する
大学として、さらに『前へ』進むためには、研究力
の向上が求められる。その要となるのがここ生田
キャンパスであり、キャンパスのハブとなる待望の
施設が完成した」と述べ、2031年に迎える大学創立
150周年に向けた引き継ぎの支援と協力を求めた。



参加者による記念撮影

2025年度には既存建物解体や外構整備工事を予定し
ており、2026年3月に整備計画全体が完了となる。

【10面に関連記事】



先日、本学の学生が主催していた舞台作品を
観劇した。学内ではなく、都内の小劇場での上
演だった。よくもこんな難しい作品を選んだも
のだ、と演目を目にした時、彼らの勇気に脱帽した。舞台を実現
させるためには、演者だけでなく、全体を支える演出や裏方のス
タッフの活躍、また作品の理解・解釈に加え、グループとしての
想像力・創造力が不可欠である。それに、観客という他者の存在
も稽古中に意識していなければならない。

さて、私たちの日常生活は、デジタルに過剰に依存していく傾

向にある。インターネットを通しての情報収集や生成AIは非常
に便利である。動画も倍速で見れば時間も節約できる。だが、技
術は進化し人間は退化する、と最近よくいわれるようになってき
た。他者との直接的な関わりが減少するため、対面でのコミュニ
ケーションは不得手、世界で起きているさまざまな出来事に人
は無関心となり、思考力も育たないからだ。

このようなデジタル時代に生きる学生たちのバイタリティーあ
ふれる舞台を観て、人間の退化を止めるためには、若者には演劇
を体験してほしいと、切に思った。

INDEX

- 23 入学式特集 学長告辞/理事長祝辞
- 45 新役職者/関係者活躍/人事/論壇
- 67 専任教員採用/学科新設/SGU評価
- 89 2025年度予算編成方針
- 10 生田キャンパスセンターフォレスト特集
- 11 短期留学/高大連携/就職キャリア支援
- 12 父母会長メッセージ/父母会総会・懇談会
- 13 リバティアカデミー/校友会支部総会
- 14 15 大学支援部/大学院合同進学相談会
- 16 紫紺の襷プロジェクト記者会見/本棚

※本号記事中の役職や学年などは、原則として取材時のものです

短期留学プログラム「タイで学ぶ!!食と私たちのサステナビリティ」を実施

明治大学国際連携本部は、2月11日から21日にかけて、短期留学プログラム「タイで学ぶ!!食と私たちのサステナビリティ」を実施した。本プログラムは、文部科学省から採択された「グローバルシナジー・プロジェクト」の一環として企画され、世界的な気候変動や人口増加などを背景に懸念されているグローバルな「食のサステナビリティ」に、一人一人が向き合い、学びを深めることを目的に開催した。プログラムには、明治大学、立教大学、法政大学、関西大学、シーナカリンウィロート大学(タイ)の5大学から24人の学生が参加した。

プログラムは、協定校のシーナカリンウィロート大学キャンパス内にある、明治大学アセアンセンターでの交流からスタート。参加した学生たちは、サステナビリティの実現に取り組む農学の研究者、国際NGO、JICAタイ事務所、国連開発計画(UNDP)、国連環境計画(UNEP)の関係者らと、それぞれの取り組みや課題について議論を交わした。続いて、サステナブルな農業の実現に向け、さまざまな事業に取り組む現地の農家を訪問。学生たちは実際に農業を体験し、不要なものや廃棄物に新たな価値を与える「アップサイクル」などのプロセス

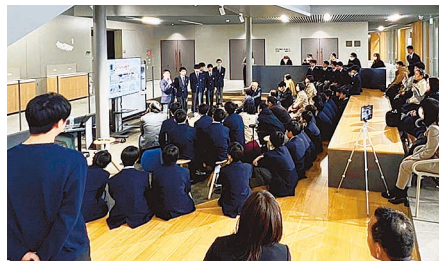


タイの商業ビル屋上を利用したファームでの集合写真

について学びを深めた。参加した学生からは、今回のプログラムを振り返って、「現地で実際に農業に取り組まれている人や農業に関わっている人は、共通して人とのつながりを大切にしている。そして、これまで関わっていなかったことに対して挑戦する勇気を持っていると感じた」という感想が上がった。(国際連携事務局)

理工学部 日本学園との連携プロジェクト発表会

2026年度から明治大学附属世田谷中学校・高等学校となる日本学園中学校・高等学校(以下「日本学園」と)共に、理工学部建築学科・田中友章研究室が取り組んでいる連携プロジェクトの発表会が、3月15日、和泉ラーニ



センターアゴラで実施された発表会の様子

ングスクエアで開催された。

日本学園の校舎は、同校の卒業生である著名建築家・今井兼次氏などの設計によるもので、国の有形文化財に登録されている1号館を中心とした緑豊かなキャンパスとなっている。附属校になると同時に共学化されることに伴い、一部校舎の増築・改修等が予定されていることから、田中研究室は、3Dスキャナー等の3次元計測技術を活用した「現在の校舎を、思い出とともに未来に残すプロジェクト」を構想した。

日本学園の中学1・2年生と本学の

大学生・大学院生が、共同で本プロジェクトに取り組み、2024年8月からの活動を通して、1号館や解体予定の木造校舎「ホワイトハウス」、生徒たちのお気に入りの場所の3次元データ化を実現した。

和泉ラーニングスクエアのセンターアゴラで実施された発表会では、プロジェクトに参加した18人の日本学園の生徒たちが、活動グループごとに発表を行った。発表では、取り組んだ活動の概要やキャンパスの特徴、活動を通じた気付きなどをプレゼンテーションした。また、両校から3人のコメンテ

ーターを招き、質疑や講評を受けた。当日は、日本学園の関係者や保護者も参加。約1年後の付属校としてのスタートへ向けて、連携を深める場となった。本プロジェクトを企画当初から支えた日本学園の谷口哲郎教頭は、「日本学園にも縁がある田中教授の提案でこの企画がスタートし、学園の生徒たちに貴重な経験を与えてくださり、感謝している。発表会は、通りがかりの大学生も見守る中、開放的な雰囲気が進み、豊かな時間が流れていると感じた」と感想を語った。

(理工学部事務局)

就職キャリア支援センター(生田) 小田急線沿線地域の新しい都市のカタチを提言

就職キャリア支援センター(生田キャンパス)は、学部1・2年生を対象に、PBL(課題解決型学習)イベントを実施した。本イベントは、小田急線沿線地域の課題解決提言を行うもので、(株)ランドフローラ、(株)日比谷花壇との産学連携プロジェクトとして、昨年に続き2回目の開催となった。「CREATING TOGETHER」をテーマに、特定の地域の魅力を引き出す「緑のまちづくり構想」の企画・発表を通じて、学生たちの社会理解・企業理解・自己理解の促進を目的として行われた。イベントは2月21日～3月21日にかけて、キックオフミーティング、現地調査、中間発表、最終発表の4部構成で実施され、参加した学生16人が、4チームに分

かれて1カ月間、課題解決に向けて取り組んだ。

イベント初日のキックオフミーティングは(株)ランドフローラが運営する貸菜園「アグリス成城」を会場として実施され、企画趣旨の説明に加え、造園業界の全体像やアーバンファーム(都市農業)についての講義が行われた。現地調査では、日本橋茅場町にある屋上菜園「Edible KAYABAEN」を訪問し、同菜園の設計を担当するフィル・キャッシュマン氏による講話を通じて、都市空間の多目的活用や社会課題解決の実例についての理解を深めた。その後、中間発表を経て、各チームが地域の特性、社会課題とその解決策、収益性などの観点を盛り込んだ企画を考案し、最終発表を行った。参加学生から



屋上菜園「Edible KAYABAEN」でフィル・キャッシュマン氏の講話を聞く学生ら

は、「企画から提案まで一貫して行うのは初めての経験で、チームメンバーと意見を擦り合わせる難しさを実感した」「現地調査などの貴重な体験を通じて、将来を考えるきっかけになった」といった声が上がった。最終発表後には、日比谷花壇グループ社員との交流会も開催され、参加学生らにとって、社会で働く姿を具体的にイメージする機会となり、大いに刺激を受けた様子だった。

博物館 「デーノタメ遺跡と縄文の世界」シンポジウムを開催

博物館は3月29日、駿河台キャンパス・グローバルホールで明治大学資源利用史研究クラスター主催のシンポジウム「埼玉県北本市デーノタメ遺跡と



(左から)大沢氏・磯野治司氏(北本市教育委員会)・阿部教授による鼎談の様子

縄文の世界」を北本市教育委員会と共催した。2024年に国の史跡に指定されたばかりの遺跡に関して、大沢芳秋氏(1977年法研修了・元北本市議会議長)によるかつての現地の様子の回顧や、宮腰哲雄名誉教授と研究クラスター代表の阿部芳郎文学部教授らによる遺跡の概要・漆に関する研究、本学学生による一般向け解説書の構想などが紹介された。当日は雨中にもかかわらず83人の参加があり、熱心に耳を傾けていた。(博物館事務局)

日本近世史ゼミが企画したミニ展示を開催

博物館は大学院文学研究科・文学部史学地理学科で日本史を学ぶ大学院生・学部生と合同で、館蔵古文書の整理・調査を行っている。現在、その成果として常設展示室にてコラム展「お江戸の契約書～近世町人社会の請人と請状～」を開催している(6月23日まで)。テーマ設定、出展品の選定、解説の原稿執筆等は全て文学部の野尻泰弘ゼミナールの学生が担当。展示では江戸時代の古文書の中から、雇用を巡る契約書であ



展示を企画制作した野尻ゼミのメンバー

る請状と引取一札を取り上げ、当時の人々の契約内容や働き方を紹介している。(博物館事務局)